

銭形平次捕物控

鉄砲汁

野村胡堂

青空文庫

「親分、近頃金の要いるようなことはありませんか」

押詰おしづつたある日、銭形平次のところへノツソリとやって来たガラツ八の八五郎が、いきなり長い顎あごを撫なでながら、こんなことを言うのです。

「何だと？ 八」

平次は自分の耳を疑うような調子で、長火鉢に埋めた顔をあげました。

「ヘツヘツ、ヘツヘツ、そう改まつて訊きかれると極きまりが悪いが、実はね、親分、思いも寄らぬ大金が転がり込んだんで」

「大きな事を言やがる。お上の御用を承る者が、手てなぐさ弄なみなどしちやならねえと、あれほどやかましく言っているじゃないか」

「博奕ばくちなんかで儲もうけた金じゃありませんよ、とんでもない」

ガラツ八は唇くちを尖とがらせて、大きく手を振りました。

「それじゃ、富籤とみくじか、無尽むじんか、——まさか拾ひろつたんじゃないやあるまいな」

「そんな氣のきかない金じやありませんよ、全く商法で儲けたんで」

「何？ 商法？ 手前てめえがかい」

「馬鹿にしちやいけません、こう見えても算盤そろばんの方は大したもので。ね、親分、安い地所でもありませんか、少し買っておいてもいいが——」

「馬鹿野郎、二朱や一分で江戸の地所が買えると思ってるのか」

「二朱や一分なら、わざわざ親分の耳には入れませんよ。大晦日おおみそかが近いから、少しは親分も喜ばしてやりてえ——と」

「何だと？」

「怒っちゃいけませんよ、ね、親分。錢形の親分は交じりつ氣のねえ江戸っ子だ。不断は滅法威勢がいいが、宵越しの錢を持ちつけねえ氣きめえ前だから、暮が近くなると、カラだらしがねえ。さぞ今頃は青息吐息で——」

「止よさねえか、八、言い当てられて向つ腹を立てるわけじゃねえが、人の面をマジマジと見ながら、何てエ言い草だ」

平次も呆氣あっけに取られて、腹を立てる張合あひあいもありません。それほど、ガラツ八の調子は、ヌケヌケとしておりました。

「箱根じゃ穴のあいたのを用立てたが、今日のはピカリと来ますぜ。親分、この通り」

そう言いながらガラツ八は、うちぶところ内懐から抜いた野暮な財布を逆にしごとく、中からゾ

ロリと出たのは、小判が七八枚に、小粒、青銭取交せて一と掴みほど。

「野郎、どこからこれを持って来やがった」

平次はやにわに中腰になると、長火鉢越しに、ガラツ八の胸倉をギューツと押えたのです。

「あ、親分、苦しい。手荒なことをしちやいけねえ」

「何をツ、この野郎ツ。どこで盗んで来やがった、真つ直ぐに白状しやがれツ」

平次の拳こぶしには、半分冗談にしても、グイグイと力が入ります。

「盗んだは情けねえ、親分、こいつは間違ひもなく商法で儲けた金ですよ」

ガラツ八は大袈裟おおげさに後ろ手を突いて、こう弁解を続けました。

「岡つ引に商法があつてたまるものか。盗んだんでなきや、どこから持って来た、さア言えツ」

「言うよ、言いますよ、——言わなくてどうするものですか、——おう痛いたえ、喉のどぼとけ仏ぼんが
ピリピリするじゃありませんか」

「喉仏の二つや三つローズにしたって構うことはねえ、さア言え」

「驚いたなア、持ちつけねえ金を持つと、喉仏に祟るとは知らなかったよ」

「無駄はもう沢山だ。金をどこから出した、それを早くブチまけてしまえ」

平次が躍起となるのも無理のないことでした。正直と馬鹿力が取得のガラツ八が、万々一、その頃の岡っ引の習慣に引摺り込まれて、うっかり役得でも稼ぐ気になったら、貧乏と片意地を売物にしてきた、平次の顔は一ぺんに潰れることでしょう。

「親分、心配するのも無理はねえが、これは筋の悪い金じゃありません。実は親分も知つていなさるあつしの赤鰯あかいわしを、望み手があつて売つたんで」

「何？ 手前の脇差を売つた？」

「へエ——去年の暮、柳原の古道具屋を冷かし損ねて買った、あの脇差が、十両になるとは思わなかったでしょう」

ガラツ八の鼻は蠢うごめきます。

「手前が二分で買って、ひどく腐っていたあの脇差が、十両になったというのか」

「その通りですよ、親分、あの脇差を見た人があつて、恐ろしく錆さびびている上に無銘だが、彦四郎ひこしろう貞宗さだむねに間違いはない、もし間違いだったら、俺の損ということにして、現金十両

で買うがどうだ、という話でさ」

「フーム」

「本当に貞宗だった日にや、十両で売つちや大変に損だから、一日待って貰つて、知り合いの刀屋を二三軒当ってみると、——とんでもない、そいつは備前物で、彦四郎でも藤四郎とうしでもあるはずはねえ。その上日本一の大なまくらだから、鍋の尻を引つ掻くより外に役に立たない代物しろものだ、望み手があるなら、拵こしらえごと一両で売つても大儲けだ——と言うんで、思い切つて手放しましたよ、親分」

「呆れ返つた野郎だ。手前はその刀屋の鑑定めいきを、相手に言わなかったのか」

「言いましたよ、念入りに輪をかけて言つてやったが、相手は少しも驚かねえ——彦四郎貞宗でなきや、師匠ごろうにゆうじょうまさむねの五郎入道正宗だろう。せつかく見込んだ品だから十両が二十両でも買つておきてえとこうだ」

「……………」

「ね、親分、こんな正直な商法はないでしょう」

「……………」

「生れて初めて入つた十両の金だ。一人で費つかつちや冥利みょうりが悪いから、とりあえず親分に

見て貰うつもりで持つて来ましたよ。ね、何かこう役に立てるような口はありませんか、親分。差当り払う当てがなかったら、地所を買うとか、家を建てるとか——」

ガラツ八は悉ごとごとくいい心持でした。七八枚の小判を畳の上へ並べたり、重ねたり、チャリンと叩いてみたりするのです。

「止よしてくれ、俺はその音を聞くと虫がが起きるよ」

「へッ、負惜しみが強いね、親分」

「馬鹿な野郎だ。八両や十両で、江戸の真ん中に家うちが建つ気でいやがる」

「家なんか建たなくなつて構がやしませんよ。これだけありや大福餅を買つても、随分出でが
ありますぜ」

「呆あきれて物が言えねえ、——だがな、八、見す見す大なまくらと知つて、手前の脇差を十
両で買うのは少し変じやないか」

「変じやありませんよ、氣に入りや、跛馬だつて買いますよ」

「待つてくれ、——こいつは少し臭いぞ」

錢形平次はもう一度長火鉢に顔を埋めました。暮のやり繰りと違つて、こいつはどうやら
思案の仕甲斐がありそうです。それを真似するともなく、八五郎も高々と腕こまぬを拱こまぬきまし

た。

畳の上に並べた七八枚の小判も、何となく引つ込みのつかない姿です。

二

「八、近頃何か変なことがありやしなかつたか」

平次は改めてこう訊きました。

「変な事？」

「たとえば、手前が嗅ぎ出した犯人ほしとか、腑ふに落ちないと思つた事とか——」

「ありませんよ」

「何かの証拠を握るとか——」

「なんにも握りやしませんよ」

ガラツ八はあまりにも屈託のない顔です。

「そんなはずはないが、——待てよ、その、手前から脇差を買つたのは誰だい」

「浜町の吉三郎きちさぶろう、——遊び人で」

「吉三郎なら知っている。賭事もしない様子だが、妙に金廻りのいい野郎だ、——その吉三郎とどこで知合になった」

「髪結床で、——あつしとちようど互たがいせん先せんという碁ですよ」

「手前、浜町まで顔を剃ありに行くのかい」

「いえ、吉三郎の野郎が町内の錨いかり床どこまで来るんで、——あすこの親方の剃かみそり刀ばりがたまらねえって」

「錨床まげの親方は、鬚まげはうまいが、剃刀は下手じゃないか」

「あつしもそう思うんですがね」

「ところで、吉三郎は、何か手前に頼みはしなかったか」

「いいえ」

「少し変だな、八。脇差を売った時、何か言っただと思ふが——」

平次の間は次第に核心に触れて行きます。

「言いましたよ、あつしの煙草入の根付を見て、そいつは気に入ったから、脇差と一緒に譲げほりってくれ——って」

「あの牙彫げほりの——」

「どうせ浜町河岸で拾った品だから、脇差へおまけにつけましたよ」

「浜町で拾った？」

「へエ——」

ガラツ八の話は少し変つております。——「一と月ばかり前、夜釣に行つた帰り、白々明けの浜町河岸に船を着けたことがありました。そのとき自分の船より一と足先に岸へ漕ぎ寄せた伝馬てんまが、炭俵と米俵を二十五六俵おか陸へ揚げて、サツサと大川を漕ぎ戻つたのを見ていると、足元の石垣の上に、牙彫まるとの円いものが一つ、危うく水に落ちそうに引つ掛つていた」——というのです。

拾つて見ると、ちょうど手頃な根付で、真ん中に穴まであいておりますのが、彫刻は怪奇を極めて、唐草模様と鬼のような縮れつ毛の人間の首と、それから得体の知れない髻ひげ文字がベタ一面に彫つてあつたのを、暢気のんきなガラツ八は、自分の煙草入に付けて、そのまま腰に挟んで歩いていたのでした。

「何だ、拾つたものをそのまま腰へブラ下げていたのかい」

平次も少し呆れましたが、今に始めぬガラツ八の暢気さが、腹を立てるにしても、少し馬鹿馬鹿しかったのです。

「どうせ馬の骨か牛の骨に細工をしたものですよ。吉三郎は三拝九拝して持って行ったが、あんなものが何かになりますか、親分」

「呆れた野郎だ」

平次は誰へともなくこう言いました。

「こんな事が商法になるなら、江戸中の古道具屋を漁って、安物の脇差をうんと買い集めようかと思うが、どんなもので」

「いい加減にしないか、八。吉三郎の狙ったのは、赤鯛じゃなくて牙彫の根付だったかも知れないな——とにかく、十両の金を持って行って、脇差と根付を買い戻して来るがいい」

「三日も前のことですよ、親分」

「三日前だつて、三年前だつていいじゃないか」

「十両の金が、三日もあつしの手は無事でいるわけではないじゃありませんか」

「仕様のねえ野郎だ、いくら費つかったんだ」

「店たな賃ちんと米屋酒屋の払いと、煙草を一つと大福餅を十六文もん買つて、一両二分と六十八文」

「いやに刻きざみやがったな、——お静、一両二分と六十八文、お前のところにないか」

平次はお勝手の方へ声を掛けます。

「お前さん、——そんな事を言つたつて」

お静の声は口の中に消えました。差迫る大晦日を控えてここも大世話場の真つ最中だったのです。

「気のきかねえ事を言うな、何のために質屋が暖簾のれんを掛けておくんだ。俺の着替えをそつくり持つて行きや——」

「でも、あと三日で年始廻りじやありませんか」

「この正月は風邪を引くことにするよ」

「……………」

お静は黙つて出て行つた様子でした。

「済まねえ、親分」

ガラツ八は萎しおれ返つて、平手で額を叩いております。

「こいつは毘わなだつたのさ、八。これからも気をつけることだ、——なアに、お静のことなんか心配することがあるものか、こちとらの女房は、貧乏や十手には馴れつこだよ」

平次はそう言つてカラカラと笑うのでした。

三

「た、大変だ、親分」

「また大変の大安売が来やがった、——何だい、八」

十両に纏めた金を握って、浜町の吉三郎のところへ駆けて行ったはずの八五郎が、半はんと刻き（一時間）も経たないうちに、面喰らった旋風つむじかぜのように舞い戻って来たのでした。

「こいつは驚くぜ、親分、吉三郎が昨夜死んだんだ」

「何？」

平次もさすがに立ち上がりました。

「下手人は鉄砲汗さ」

「河豚ふぐの毒にやられたのか」

大きな失望が、平次の顔をサツと翳かげらせます。

「友達が三人で河豚鍋を突つつきながら、一杯やらかしているまではよかったが、その晩吉三郎が毒あたに中って、七転八倒の苦しみ、夜明け前に息を引取ったということですよ」

「あとの二人はどうした」

「無事だったそうで」

「誰と誰だ」

「そいつは聞かなかった」

「行ってみよう、八。どうも俺には腑に落ちない事だらけだ」

平次は帯を締め直して、草履を突っかけました。

「河豚で死んだと解つても——ですかい、親分」

「河豚だつていろいろあるよ。後学のためだ、一緒に来るがいい」

二人はそのまま、浜町の吉三郎の家へ飛んだことは言うまでもありません。

吉三郎の派手な生活くらしに似ず、家は至つて地味で、贅ぜいたく沢ではあるが、何となく粹好みでした。付き合いがあまりなかったものか、集まっているのは、ほんの近所の人達が二三人、それも平次とガラツ八の姿を見ると、妙に掛り合いを惧おそれるように、コソコソと姿を隠してしまいます。

「とんだことだったな、お神かみさん」

「ま、銭形の親分さん、とんだことになってしまいました」

女房のお由よし、二十五六の良い年増が、顔を拳こぶしげることさえ出来ない様子で、逆さ屏風びょうぶ

の中に泣き崩れているのでした。

「昨夜の客は誰と誰だい」

平次は形ばかりの線香をあげてから、こう静かに訊きました。

「それが、よく、わかりません」

「はて？」

「ちよいちよい見かけるお顔ですが——」

「年の頃は」

「二十七八と五十二三」

「河豚はどこから買ったんだ」

「年を取った方のお客が持つて来ました。竹の皮包みにして、——今日漁とったばかりのを、知合からわけて貰って来たが、よく洗ってあるから大丈夫だ——と言って」

「確かに三人で食ったのだね」

「それはもう間違いもありません、大層おいしいから、私にも是非とすすめました、私は河豚うにと海胆は我慢にもいけません」

「二人の客が帰ってから、毒が効き始めたのか」

「え」

「河豚の残りがあるだろう、生でも煮たのでも構わねえ、チヨイと見せて貰おうか」

平次は妙に執拗しつように突っ込みます。

「それが、その残ったのを、みんな竹の皮に包んで持って行ってしまいました」

「吉三郎は河豚をちよいちよいやるのかい」

「いえ、生れて初めてだそうで、ひどく嫌がっていました、二人に笑われて我慢に食べたようです。でも、一と箸はし二箸食い始めると、——こりやとんだうまいや、鮫鮓あんこうそつくりだ——そんな事を言っていました」

「鮫鮓そつくりと言ったのかい」

「それから酒の味がどうも変だ、舌のせいかしらとも言っていました」

女房のお由は進まない様子ながら、問われるままに説明しました。

「三人で一つ鍋を突つついたのだろうか」

「え、それなのに、中あたつたのが一人は情けないじゃありませんか」

「二人が無事とどうしてわかった」

「どこで噂を聞いたか、今朝お二人はあわてて飛んで来ました。御近所の衆も御存じです」

が、何か亭主が預かつたものがあるとか言つて、仏様の懷までかき廻して行きましたが――

「それが見付かつたのかい」

「そこまでは解りません」

話が次第にこんがらかつて、そして微妙になつて行きます。

「おや？ この脇差ですよ、親分」

ガラツ八は死骸の枕許に置いてあつた、魔除けの脇差を取上げました。言うまでもなく三日前にガラツ八が吉三郎に売つた、十両の赤鯛丸です。

「そいつには大した用事がなかつたんだよ。ところでお神さん、毒は何刻ほど経つて効き始めたんだ」

「鍋が空になると、二人のお客はすぐ帰りました。それを送つて出ると、上がり框で引つくり返つたきり――」

「やはり身体が痺れたんだね」

お由の声が涙に途切れるのを、平次は慰め顔に言うのでした。

「いえ、痺れもどうもしません。急に腹の中へ火が付いたようだと言つて、目も当てられ

ない苦しみをしましたが、とうとう黒血を吐いて夜明け前に息を引取りました」

「医者は何？」

「町内の玄道げんどうさんに診てもらいましたが、何の役にも立ちません」

お由はこれだけ言うのが精一杯でした。平次の問いが途切れると、吉三郎の死骸に獅し噛がみつくように、時々は声を立てて泣いております。

四

「親分、河豚汁ふぐじるじゃ十手捕縄にも及ばないじゃありませんか」

吉三郎の家を出ると、ガラツ八はもう天下泰平の顔になっていたのです。

「手前てまえはそう思うのか」

「だって親分」

「だから幾年経つても、大物は拳がらねえのさ」

銭形平次は八五郎の鈍骨どんこつをあわれむともなく、こう言うのでした。

「へエ——、すると、何か変なことでもあるんで？」

「その辺にいる町内の人達に、今朝吉三郎の家へ来た、二人連れの人相を訊くがいい、その辺が手繰りどころだ」

「へエ——」

ガラツ八は吉三郎の家の裏口へ廻りましたが、やがて、狐につままれたような顔をして戻つて来た。

「どうした、八？」

「変ですぞ、親分。今朝ここへやつて来て、仏様の懐までかき廻して行つたのは、三十前後の凄い年増と、四十恰好の浪人者らしい男だそうですよ」

「それ見るがいい」

「吉三郎夫妻とはよつほど昵懇の様子で、時々この家へ来るそうですよ」

「所、名前は？」

「そいつは解らねえ、——お由を締め上げてみましょうか」

「無駄だよ、止すがいい。それに亭主の死骸の側で手荒なことをしちや、いかに御用でも寝醒めがよくねえ」

「親分は相変らず弱気だ」

「それでいいのさ、気が強くて考えが浅かった日にや、岡つ引は罪ばかり作るよ」
 平次はそんな事を言いながら、町内の本道、町野まちのげんどう玄道を訪ねました。

吉三郎毒死の顛末てんまつを細々と訊くと、

「親分、あれはどうも腑に落ちないよ、河豚の毒ばかりではなかったようだ」

「すると、何か外の毒でも盛られた様子で？」

「いや、そういうわけじゃない、第一あんな激しい毒薬は、江戸中の生薬屋きぐすりやを捜したつてない、——南蛮物なら知らないが——」

「南蛮物？」

「やはり河豚にしておくほかはあるまい。三人で食って一人しか中あたらないというのは、河豚の外にはないことだ。鍋の中に外の毒が入っていたなら、三人が三人ともやられるはずだ」

玄道は大きな坊主頭を振るばかりです。

平次とガラツ八はもう一度吉三郎の家へ戻りました。が、お由はもう白い眼を見せるだけで、二人の間にもろくに答えてはくれず、親類縁者も、友達もない様子で、話を手繰り出す工夫もありません。

「お神さん、もう一つ二つ訊きたいが、お前さんとこの宗旨は何だえ」

平次はつかぬ事をきくのでした。

「門徒ですよ、今お寺様が来ますから、お宗旨の事ならそつちへ訊いて下さい」

少しけんもほろろです。

「江戸には親類もないんだね」

「あつたつて遠い身寄りも音信不通で、付合つちやくれません。もつとも長崎には亭主やどの弟がいますが、お葬式とむらひに間に合うわけはなし」

「そいつは気の毒だ」

そんな事を言いながら、家の中を念入りに見ましたが、ひどく裕福らしいという外には、何の変つたところもなかつたのです。

「吉三郎は遊び人で通っていたが、勝負事は好きじゃなかつたそうだ。立入つたことを訊くが、世過ぎは何でやっていたんだ」

平次の問はかなり突つ込みます。が、

「私にも解りませんよ。金の成る木でも持つていたんでしょう」

お由は空そらうそぶ嘯なげいて相手にしそうもありません。

「もう一つ、三日前に八五郎が、この脇差と牙彫げぼりの根付を一つ、十両で吉三郎に売ったそ
うだ。少しわけがあつて、それを返して貰いたいんだが」

平次は十両の金をお由の前に押しやって、相手の出ようを待ちました。

「勝手にその脇差を持って行って下さい。もつとも牙彫の根付なんかは知りませんよ」

「確かに持っていたはずだが——」

「親分も、仏様の懐が見たいんでしょう。勝手にするがいい、馬鹿馬鹿しい」

お由は気が立っているらしく、こう言つてプイと座を立ちました。

「見ましようか、親分」

立ちかかる八五郎。

「無駄だろう、今朝抜かれてしまったよ、——赤鯛丸なんか持って行つても仕様があるま
い、——十両の金さえ返しや気が済む、さア帰ろうか、八」

平次はもう何の未練気もなく立ち上がるのでした。

五

その日半日、平次はどこともなく飛んで行ってしまいました。ガラツ八は吉三郎の家を宵まで見張りしましたが、町内の百万遍の講こうじゅう中ちゆうが来たのと、お通夜の小坊主が、お義理だけの経をあげた外には、何の変りもありません。

フラリと平次の家へ来たのは亥刻いっく（午後八時）少し過ぎ、食わず飲まずで見張っていてひどく疲れております。

「親分は？」

「まだ戻りませんよ。入って待っていて下さいな、八さん」

お静わだかまの蟠わだかまりない調子に、八五郎はいつものようにヌツと入って長火鉢の前に頬杖を突きました。

「どこへ廻つたらうなア」

「お支度は、八さん」

お静はそれに構わず、腹の減っているらしい八五郎の顔を、少し遠くから鑑定しております。

「親分が帰ってから御馳走になりましたしょう」
ガラツ八にもやはり遠慮はあったのです。

「それじゃ、せめて一本爛けましょう」

「へエ、——変なことがあつたもので——」

「まあ、八さん、たまにはお酒ぐらいはありますよ。——ツイ先刻、八丁堀の旦那から、心祝いがあるからと、わざわざ一升届けて下さいましたよ」

「そいつは豪儀だ、——さすがに笹野の旦那は気が付くぜ、へッ、へッ」

八五郎はすっかり相好を崩してしまいます。

お静はその間に、銅壺に突つ込んだ徳利を拭いて、八五郎の前へ据えた膳の上へ、そつと載せてやりました。元は水茶屋に奉公していたお静ですが、さすがに夫の留守に、自分の酒の酌までしてやるのを憚つたのでしよう。

「済みません」

「なあに、こつちが勝手なんで、有難えな。ト、ト、ト、散ります散りますと来やがる。へッ、へッ、良い色をしているぜ」

グイグイと喉を鳴らしながら、猪口の手を胸のあたりまで持って行つた八五郎。

「待ちな、八」

ガラリと格子が開きました。銭形平次が帰つて来たのです。盃を膳へ置くかと思つた八

五郎の手は、意地汚くそのまま唇へ——。

「あッ」

八五郎の手をハタと打つたものがあります。盃は後ろに飛んで、パツと胸から膝へ飛散る酒。平次の煙草入が飛んで来たのでした。

「親分」

八五郎の声にも怒りがあります。

「馬鹿ッ、そいつを呑むと命がねえぞ」

「えッ」

「今路地の外まで帰って来ると、変な野郎がウロウロしているから、様子を見ているうちに、お静の話を聞いてしまったよ、——八丁堀の旦那が、心祝いに酒を下すつたなんて、そいつは大嘘だ。俺はつい先刻まで、八丁堀に居たんだから、お酒を下さるなら、そんなお話の出ないわけはねえ。心祝いどころか、笹野の旦那は明日は先代様の法要で、牛込のお寺まで行かなきゃならないと言つていなすつたよ」

そう言いながら平次は、埃も叩かずに入り込んで、黙ったままお静の差出す樽を受取つて眺めました。

「親分、そ、そいつは本当ですかえ」

「嘘だった日にや、俺は八に申し訳がねえことになる。これを見るがいい、樽は町内の酒屋のだ。八丁堀から届いたのでない証拠は、このますさだ定の印で判るだろう」

「……………」

八五郎もそう言われると、口もきけません。

「危ないところだ、八。そいつを一と猪口呑んだだけで、手前は俺の身代りに、血へどを吐いて死ぬところよ」

「……………」

「だが、癩しやくにさわる野郎じゃないか。この平次を鱈どじょうと間違えやがって」

「誰がこんな事をしたんだ、親分」

八五郎は漸ようやく人心地がつかまりました。

「吉三郎を殺した奴だよ」

「じゃ河豚ふぐ？」

「馬鹿、河豚が酒を買って、届けるかよ」

「さア解らねえ」

「俺も解らねえが、こいつは大変な曲くせもの者だ、退治しなきゃ御府内の難儀、お上の御威光にも拘わる。来い、八。今晚のうちに罎らちをあけてやる」

「へエ——」

八五郎は平次の劍幕に釣られて、モソモソと立ち上がりました。

「お静、その酒は匂いを嗅いでもならねえよ。封印をして大事にしまっておけ」

「ハイ」

言い捨てた平次。その足で駆け付けたのは、町内の酒屋升ますさだ定でした。番頭に訊くと、

「いい年増でしたよ。一番良いのを一升量らせて、小僧に持たせてやりましょうと言うと、イヤ、それには及ばない、私が持つて行かなきゃ、親切が届かないって」

「その女は三十前後の——」

「大店おおだなの御新造ごしんぞといった風でした。頭巾を冠っているので、髪形はわかりませんが」

「有難う、とんだ手数だった」

平次は外へ出ると、真つ暗な師走しわすの空を仰いで、大きく息をしました。見えざる敵のしたたかさを改めて犇ひしひし々と感じた様子です。

六

「お神さん、そいつは間違いだぜ。吉三郎は河豚で死んだんじゃねえ、立派に毒害されたんだ」

通夜の人数を追っ払って、八五郎に見張らせた平次は、吉三郎の死骸を中に、お由と膝詰め談判を始めたのでした。

「まさか、親分」

お由は容易に信じそうもありません。

「証拠はいくらでもある。第一、昨夜三人で食ったのは、河豚じゃない鮫鱈鍋だ。吉三郎が河豚を食ったことがないと言うから、鮫鱈を持って来て、河豚ということにして食わせたんだ。鮫鱈鍋で死ぬ気遣いはないが、河豚なら随分三人のうち一人死ぬということがないではない——、あいつ等はそこを狙ったんだ」

「……………」

「残った魚を竹の皮包みにして持って帰ったのは、後で鮫鱈と判っては面白くないからだ。それから、河豚の毒なら身体が痺れるはずだが、そんな事がなくて、腹の中が焼け爛れる

ようで、血を吐いたのは南蛮渡りの毒薬に違いない。玄道さんもそう言っている」

「……………」

「毒は、吉三郎の盃の中に入っていたんだ。多分、ちよいと立った時か何か、投げ込まれたんだろう。——その証拠は、昨夜は三人とも、盃のやり取りはしなかったはずだ」

「えッ、その、その通りですよ、親分。いつも差したり差されたりするのが、昨夜は最初から御家人喜六の言い出しで盃のやり取りなし、うんと食って飲もうということにしたようでした」

「それ見るがいい。お前の配偶は、その御家人喜六と、もう一人の年増に殺されたんだ。今夜は俺のところへまで毒酒を持込みやがったよ。放っておくと何をやり出すかも解らない」

「えッ」

「解ったか、お神さん、夫の敵を討つ気はないのか」

「畜生ッ、そうとは知らずに、——私は亭主に口止めされたのを守って、今まであの二人を庇ってばかりいました、——敵を討って下さい、親分さん」

お由にも、漸く事件の全貌が解った様子です。

「それにしても相手の素姓が解らなくちや、敵の討ちようがない。あの女は何だい」

「唐人お勇ゆうという大変な女ですよ」

「三人で何かやっていたはずだが——」

「何か大仕事をしているようでしたが、私には言ってくれません」

お由は全く何にも知らない様子でした。

「仲間はたった三人きりか」

「子分は二三十人あるはずです」

「ね、お神さん、仏様のことを悪く言うわけじゃないが、吉三郎はその御家人喜六と唐人お勇に加担して大変なことをやっていたんだ」

「……………」

「俺の見当では、たぶん拔荷ぬけにを扱っていたのだと思う、——拔荷ぬけにという何でもないようだが、こいつは大変な御法度ごほつどで、露頭はりつけすると獄門はりつけにも磔はりつけ刑にもなる」

「……………」

「自分の栄華のために、紅毛人こうもうじんに御国の宝をやって、やくたいもない贅ぜい沢たくな品物を買入れ、それを三倍五倍の利潤もうけで、金持や物好きな人間に売り付けるのだから、拔荷扱いは

商人の風上にもおけねえ、屑くずのような人間だ」

「……………」

「お国の宝の大判小判、あれを紅毛人は命がけで欲しがるそうだ。だから、命知らずの紅毛人は、羅紗らしゃだの、ビードロだの、いろいろの小間物だの、あまり生活くらしの足しにならぬ物を持込んで、この国の大判小判と換えて行くのだ。長崎ではお役人の目がやかましいから、九州の沖で日本の船に積換え、米や炭の荷に交せて、公方くぼうさま様お膝元へ持って来るに違いない。江戸へは諸国の荷が集まるからかえってわからない道理だ、——現にお前の夫の吉三郎を殺したのも、その抜荷で入った南蛮秘法の毒薬だ」

平次の舌は焰ほのおのように燃えます。

「親分さん」

「私慾のために掟おきてを破り、そのうえ人まで殺すような悪者は放っておけない。お前の知つてることがあつたらみんな言つてくれ、許しておけない奴等だ」

「親分さん、みんな申上げます」

「それは良い心掛けだ、夫の罪亡ぼしにもなるだろう」

「私は何にも知りません、——でも、船の入る時の合図だけは知っています。——時々見

張りをさせられましたから」

「有難い、それが解りや」

「……………」

お由は声を潜めました。

七

その晩神田の平次の家は焼けたのです。

こればかりは、銭形平次も気が付かなかつたのでしよう。毒酒の計略は見事に見破りましたが、それだけで油断をしていると、その夜の丑刻半やつ（午前三時）頃、三方からあがつた火の手は、瞬ひまく隙に平次の長屋を焼き落し、近所の二三軒を半焼けにして、漸ようやく納まったのでした。

風がないのと、暮の街で注意が行届いたので、これだけで済んだのは不幸中の幸いですが、困ったことは、肝腎の銭形平次が、それつきり行方知れずになってしまったことです。

——銭形の親分が焼け死んだとよ——

——表裏の戸口は外から閉めてあつたそうだ、お静さんが命からがら逃げ出したというぜ——

そんな噂うわさが八方から飛びました。全く、焼跡にシヨンボリと立っている、気の抜けたよ
うなガラツ八の姿や、顔から腕へかけて、晒木綿さらしめゆんで巻かれた、痛々しいお静の様子を見
ると、銭形平次が死んだというのも、満更まんざらの噂ばかりではない様子です。

昼頃には八丁堀の与力笹野新三郎よりきも来ました。江戸中の顔の良い御用聞も、五人十人と
集まって来て、夕方には、それが二三十人になり、打ち湿った様子で、ポツポと烟けむる灰を
掻かせております。

日が暮れると、平次の遺骸を板囲いうちの中から運び出し戸板に載せて、回向院えこういんに移しま
した。江戸中の名ある御用聞手先が二三十人、笹野新三郎と一緒に、それに従ったことは
言うまでもありません。

その晩の戌刻半いっつ（九時）頃、この一行は回向院の寺内に入り、そこでお通夜が営まれた
のです。

同じ夜、子刻ここのつ（十二時）過ぎ、永代えいたいのあたりから漕こぎ上がった伝馬てんまが一艘そう、浜町河岸はまちょうがしに来ると、船頭ふねづかが舳ともの灯ひを外して、十文字に二度、三度と振りました。

師走しわす二十九日うらふし、漆うるしのような闇の中に、その光が水を渡つて走ると、どこからともなく河岸がしに集まった人数がぎつと二十人ばかり。

「変なとき船が入ったものだね、お首領かしら」

「宵のうちに、永代から合図があつてびつくりしたよ、——今頃入る船はないはずだが、春になつてから来るというのが、何かの都合で早く入つたんだろう」

「そういつた囁ささやきが、あちら、こちらに交されます。」

「それよ、板を渡してくれ」

「おい」

「酒の荷が先か米の荷が先か」

「明日は大晦日おおみそかだ、酒の荷を先にしてくれ。三河屋も、長崎屋も来ているぞ」

「いつの間にやら、屋号を入れた提灯ちようちんが二つ三つ用意されました。屈強な若者達が、船から運び出す荷を、陸おかに待っている人足が、言葉少なに受取つて、どこともなく姿を消します。」

船の中の荷物はザツと二十七八。その全部を運び終ると、後に残ったのは、頭巾を目深まぶかに冠った男と女の二人でした。

「これでよし、帰ろうか」

「帰りましょう」

歩みを移す二人の前へ――。

「御用ッ」

ヌツと突つ立つたのは八五郎のガラツ八です。

「何？」

「御家人喜六、唐人お勇、神妙にせい」

パツと組付いて行くガラツ八、お勇は身をかわして、トンと肩のあたりを突きました。

「ワツ」

二三歩泳いで立直るガラツ八、その後ろから、

「えいッ」

御家人喜六の一刀が闇を劈つんぎくのを、

「俺が相手だ、来いッ」

横合いから飛込んだ十手が、ガツキと受止めました。

「邪魔だツ」

「抜荷の悪事、吉五郎殺しの下手人まで露頭をしたぞ、観念せいツ」

「何をツ」

御家人喜六は、お勇を後ろに庇かばつて、一刀を闇に構えます。

「御用ツ、御用ツ」

八方から、ヒタヒタと詰めよる捕方の人数。

「えッ、寄るな寄るな、一人残らず切つて捨てるぞッ」

御家人喜六の腕は抜群でした。

「伝馬はこちらで仕立てた偽物だ、仲間は一人残らず生捕られたぞ、神妙にお縄を頂戴せい」

先刻、船から揚げた荷物を、一つ一つ担いで行った子分は、回向院に通夜をすると見せかけた、江戸中の手先に、一人残らず後を跟つけられ、落着く先で縛られたとは、御家人喜六もまだ知らなかったでしょう。

「えッ、その方どもに縛られる喜六ではない、退どけ退け」

サツと身を翻すと、眼にも止まらぬ早業で、早くも二三人の捕方は浅傷を負わされた様子。

「油断するなツ」

後ろから激励の声を掛けたのは笹野新三郎です。

「灯だツ」

誰やらの声に応じて、どこに隠してあったか、十幾つの御用の提灯が、一度にパツと二人の曲者を照らします。

「あつしが行きましょう、この野郎には家を焼かれた怨みがあります」

パツと飛出した美丈夫。

「平次だ、平次だ」

捕物陣は二つに割れて、その道を開きました。

「生きていたのか平次、命冥加な奴だ」

苦りする御家人喜六、右手の刃は、油断なく灯にキラリとうねります。

「手前のすることはいちいち卑怯だ、我慢のならねえ野郎だ」

そう言う口を塞ぐように、喜六の刃はサツと伸びます。

「おっと危ねえ、——これでも食やがれ」

平次の右手が拳がると、夜風を剪^きつて銭が一枚、御家人喜六の唇^{くち}へ——。

「己れッ」

わずかに刃の平で受けましたが、二枚目は強^{したた}かに頬骨へ、三枚目は額へ、——眼へ——。

「野郎ッ」

ひるむ後ろから、むずとガラッ八が組付いていたのです。

「危ねえ、八」

銭形平次は驚いて飛込みました。喜六の後ろにいる唐人お勇は、ヒ首^{あいくち}を抜いて、ガラッ八の脇腹へサツと突いて出たのです。

平次は危うくそれを突飛ばすと、お勇のヒ首は飛龍のごとく平次の胸へ飛んで来たのでした。それをかわして、

「女、いい加減にしろッ」

飛付く平次、その手を払ってお勇の身体は、大川の寒水へ、水音高く飛込んでしまいました。

*

「変な捕物だったね、親分」

その帰り路、柳原土手でガラツ八はこう誘いかけました。

「脇差を十両に売ったのが始まりさ、手前が勘のいい人間で、吉三郎の心持を読むと、こいつは危ないことだったよ」

平次は面白そうです。

「へエ——」

「まだ判らねえのか、——手前に抜荷を揚げる現場を見られたから、大なまくらを十両で買ってな、手前の御機嫌を取ったのさ、——見て見ぬ振りをしてくれという謎さ」

「なア—る」

「今頃感心する奴があるものか、十両の元手をただ取られたようなものだ」

「へエ——」

「あの牙彫げぼりの根付は、たぶん抜荷を受取る手形のようなものだろう。吉三郎は仲間では三下だが、あの牙彫の手形を手前のところから見付けて持って行くと、急に頭領かしらの株を狙っ

て、抜荷の大儲けを一人占めにしようという大望を起したのき」

「……………」

「それと気の付いた御家人喜六と唐人お勇が、吉三郎ごときに大事の手形を取られちゃかなわないから、鮫鱈を河豚と言つて食わせ、実は毒酒で殺して死骸から牙彫の手形を抜いたのだよ」

「そう絵解きをして貰うと、そうでなかつたら嘘みたいで、へエ——」

ガラツ八はまだ長い顎を撫でております。

「だが、自分達の利潤もうけのために、お上の御法を破る奴は憎いね、その上仲間を殺したり、

——俺の家まで焼いたり」

「そういえば、親分はどこへ行きなさるつもりで——」

「お静は当分里のお袋に預けたよ、——俺はな、八、当分、八五郎の家に居候ときめたよ」

「そいつは有ありがて難え。親分を居候に置いたとあれば、あつしも肩身が広い」

「ハツハツハツ、ハツハツ」

柳原土手の夜は白みかけておりました。

大晦日の江戸の街は、一瞬転ごとに、幾百人かずつ最後の足搔あがきの埧るっぼ塙の中に、眼を覚

さして行くのでしよう。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（八）お珊文身調べ」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年12月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第七巻」中央公論社

1939（昭和14）年5月25日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1938（昭和13）年12月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2019年2月22日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

鉄砲汁

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>